

インド論理学派における真知論（prāmāṇyavāda）の展開

志田 泰盛

1 本論文の主題

本論文が対象とするのは、インド正統バラモン系に属するニヤーヤ学派 (Nyāya, 論理学派) が提唱する「真の他律説 (parataḥprāmāṇyavāda)」と呼ばれる学説の思想的展開であり、この学説が、ヴェーダ聖典の権威論証や主宰神の存在論証と連関していく過程を解明することを試みる。具体的には、古典ニヤーヤ学派における真の他律説の思想史的展開を跡付けながら、古典ニヤーヤ学派の終端ないし新ニヤーヤ学派の起源に位置する Udayana (11 世紀) による真の他律説が持つ意味を明らかにする。

まず、古典期の真の他律説については、既に山上[1993]や宇野[1996]などによりいくつかの文献の該当箇所の訳註研究が発表されているが、各論師の見解の間の微妙な差異やその思想史的展開に踏み込んだ研究はほとんどない。そこで、本論文では真の他律説が抱える諸問題に対する各論師の解決方法とその特徴を明らかにしながら、古典ニヤーヤ学派における真の他律説の展開を跡付ける。

また、古典期においては、主宰神論との連関性を持たなかった真の他律説が、Udayana により、全知なる主宰神の証明論証に援用されている点を解明すべく、真の他律説が展開される Udayana の主著 *Nyāyakusumāñjali* の原典研究を通して、Udayana の主宰神論の一端を解明する。

Udayana による真の他律説が主宰神論に関与している点は、既に CHEMPARATHY[1972]、JOSHI[2002]、石飛[2002]などにより指摘されていたが^{*1}、具体的にどのように主宰神論証につながるのかという点までは明らかにされていなかったため、その点について、本論文では文献実証的に分析を加える。

2 真知論 (prāmāṇyavāda) と 真の自律他律問題

インドの各哲学学派は、紀元前後にも遡る根本経典の段階から、人生の目的遂行に不可欠と見なされる「真知 (正しい認識)」の獲得手段の探究を重視する傾向がある。

当初、真知の獲得手段の探求というこの問題は、ヴェーダ聖典や仏教聖典が語る超経験的な宗教的真理の獲得を主眼として論じられていたが、時代を下るにつれ、徐々に日常的

^{*1} Udayana は *Nyāyakusumāñjali* (NKus) 第2篇第1詩節において、全知なる主宰神を想定する根拠が述べるが、その最初の根拠が真の他律性となっている。Cf. NKus II k.1 p.210.3-4: **pramāyāḥ paratantratvāt sargapralayasambhavāt/ tadanyasminn anāśvāsān na vidhāntarasambhavaḥ**// 「真知は他律的なので、[また、世界の] 創造と帰滅があり得るので、[また、] それ (= 主宰神) とは別 [の全知者] に対する信頼がないので、[常住な全知者である主宰神の想定と] 別様の可能性はない。」

な認識の真偽にも一般化して論じられるようになる。

具体的には、「認識の正しさ」を意味する 真 (prāmāṇya) という概念を中心に論究され、特に 認識が持つ 真 とは何か、認識発生の際に 真 を決定する要因は何か、認識の 真 はいかにして検証されるのか、という3点について、学派毎に様々な理論が提示されるようになる。 真 の定義、 真 の発生要因、 真 の検証方法、というこれらの3点は、後に「真知論 (prāmāṇyavāda)」と呼ばれる認識論上の一大トピックを構成する主要な下位論題を形成することになる。

上記の3問題の中でも、 真 の発生要因と 真 の検証方法をめぐっては、「認識の 真 はその発生においても検証においても外的要因に依存しない」と見なす 真 の自律説と、「認識の 真 はその発生においても検証においても外的要因に依存する」と見なす 真 の他律説の間の対立は有名であり、特に、ミーマーンサー学派 (Mīmāṃsā、聖典解釈学派) とニヤーヤ学派の間で、 真 の自律他律論争が繰り広げられている。

真 の自律説 インド哲学史上、 真 の自律他律問題を最初に提起した Kumārila (ミーマーンサー学派) は 真 の自律説を主張した。ヴェーダ聖典が永遠不滅であると考えたミーマーンサー学派にとって、ヴェーダ聖典が宗教的真理 ダルマ に関する唯一絶対の認識根拠であることを証明するために、この問題を論じたと考えられる。

自律説派は、永遠であるが故に発生原因を持たないヴェーダ聖典や、ヴェーダ聖典を介して生じる認識を正当化するため、認識一般の 真 の起源についても、認識原因の中にある何らかの要因を必要とすることはなく、偽 の要因である 瑕疵 の有無を以て、 真 や 偽 が存在論的に決定すると考える。すなわち、認識や言明の原因に 瑕疵 が無い限り、あるいはそもそも原因のないヴェーダ聖典には、 真 が存在すると主張する。

また、真偽の検証に関しても、 瑕疵 の有無による検証方法を提示し、「 瑕疵 などの阻害要因が確認されない限り 真 を信じる」という反証主義的な理論を主張する。

一方で、自律説派は、 真 の他律説に対して非常に懐疑的立場から批判を加える。特に他律的検証の基礎づけと、検証と行為発動の先後関係という問題は、 真 の他律説が抱える根幹的問題であり、古くから Kumārila らによって厳しく批判されている。

古典ニヤーヤ学派における他律説の目的 ニヤーヤ学派は、ヴェーダ聖典の権威を認める点においてミーマーンサー学派と同じ立場にあり、Jayanta (9世紀) や Vācaspati (10世紀) は、 真 の他律説をヴェーダ聖典の権威論証と関連させて論じている。

2人の他律的検証理論は、認識の 真 が原則として、その認識に基づく行為発動の成否により検証するというものである。しかし、ヴェーダ祭式の実践に基づく天界などの結果は経験できないだけでなく、祭式執行には多額の出費を伴うため、祭式の有効性は事前

に知られなければならない。これらのことから、特にヴェーダ聖典の真偽を事前に検証しうる理論を構築することになる。

したがって、Jayanta や Vācaspati に代表される古典ニヤーヤ学派の 真 の他律説の最重要課題は、ヴェーダ祭式執行への行為発動を促す事前検証を、他律説の立場から説明づける点にある。

3 *Nyāyakusumāñjali* の真知論研究

Udayana の主宰神論の特徴は、従来、認識論・言語論などの枠内で論じられてきた様々な議論をそれぞれ主宰神論へと集約させる点にあり、経験主義的な色合いの強かった 真 の他律説にも、主宰神の存在論証の一端を担わせる点に独創性がある。

また、*Nyāyakusumāñjali* における Udayana の主宰神論は、主として経験と推論に依拠する合理主義的なものであることが CHEMPARATHY[1972: p7.2-6]らに指摘されており、その独特の形式と方法に対して、現代の研究者からも極めて高い評価を受けている。

一方で、*Nyāyakusumāñjali* に代表される Udayana の諸著作は、インド哲学文献の中でも非常に難解な部類に入ることにも諸研究者により指摘されてきた。著作中の各論は、伝統的な各教義の間の整合性に気を配りながら精緻に論じられているため、その読解には、各論毎に前提とされる古典期の議論についての十全な知識が前提とされる。そのため、CHEMPARATHY[1972], JOSHI[2002]など、議論の骨子を要約した概説的研究はあるものの、冒頭箇所を含むいくつかの部分を除き、信頼に足る訳註研究がないのが現状である。

また、*Nyāyakusumāñjali* のテキストは、既に 8 種以上の刊本が出版されているものの、それらのうち 5 種の刊本を省察した CHEMPARATHY[1972]は、より十全な刊本が必要であると説いている。したがって、思想研究の土台となるテキストの確度が十分であるとはいえない。

以上のような背景のもと、本論文では、Udayana の主宰神論の一端を形成する 真 の他律説の解明へ向けて、以下の指針を軸に取り組んだ。

まず、*Nyāyakusumāñjali* のテキスト読解に際し、入手した限りの 3 本の写本を使用し、従来の刊行テキストを批判的に検討し、テキストの信頼度を高めるという方法である。

次に、Udayana に先行する古典期の諸論師が提示する 真 の他律説の思想史的研究を起点とすることで、Udayana の真知論の発展性を浮き彫りにすることである。

4 本論文の成果

以上の方法による本研究の成果を簡潔に記す。

まず、古典ニヤーヤ学派における 真 の他律説は、ヴェーダ聖典の権威論証とヴェーダ祭式の実践促進を主眼としおり、主宰神論との連関性がほとんどないのに対して、Udayana の *Nyāyakusumāñjali* においては、真 の発生と検証という2つの側面の他律説が、それぞれ主宰神の存在論証へ関与している。

まず、真 の発生の側面の他律説は、全ての真知の原因に 真 の決定要因が存在することを結論とする。このことは、ヴェーダ聖典の作者としての主宰神の想定を導く。

一方で、検証の側面の自律他律問題は、確実な認識の検証方法を主題とする。Udayana のこの議論も、単に認識論上の一問題が論じられているかのようにも見えるが、その奥に全知なる主宰神の想定への伏線が張られていると考えられる。

他律的検証理論が抱える最大の問題は、検証の無限後退 であり、古典期の論師たちは、数種の自明な認識を設定することで 検証の無限後退 を回避している。しかし、*Nyāyakusumāñjali* に登場する想定対論者は、自明と見なされる認識の確実性にも徹底的に批判を加える。この極めて懐疑的な想定反論に対して、Udayana は、真 の自律説を説く対論者もまた確実な認識に到達できないことを示すことで、回答に代えている。

これらの議論は、経験主義的な検証方法では絶対的な確実性に到達できないことを論じているかのようなのである。このことから、Udayana が、外界対象と認識との対応ないし外界対象の存在自体を保証する視点として、全知なる主宰神の存在を要請していることが推測できる。しかし、この点については、*Nyāyakusumāñjali* 中の各論との相互連絡なども検討し、同書が主題とする主宰神の存在論証の構造解明を待って、さらに検証する必要がある。

また、本研究では、*Nyāyakusumāñjali* 真 の定義を論じる第4篇も扱った。そこにおいて、Udayana は、ニヤーヤ学派の認識論の中心的な術語である「真知根拠 (pramāṇa)」を再定義することで、認識論の枠組みの中に、主宰神とその認識を積極的に取り込んでおり、また、Udayana のこの見解が、さらに後のニヤーヤ学派の論師に継承されている点を明らかにした。

伝統的教義を重要視するインド哲学の中において、過去の論師による術語の定義を再解釈することはしばしば見受けられるものの、定義自体を全面的に変更する点は注目に値する。このことは、Udayana の時代に論理学派が有神論的傾向を強めていることを導出する一つの有力な根拠となり得る。

参考文献

CHEMPARATHY, George

- [1972] *An Indian Rational Theology: An Introduction to Udayana's Nyāyakusumāñjali*, Publications of the De Noblili Research Library, Vienna.

ISHITOBI, Sadanori (石飛 貞典)

- [2002] 「ヴェーダーンタ・デーシカと主宰神の推論」, 『印度哲学仏教学』 17, pp.179–190.

JOSHI, Hem Chandra

- [2002] *Nyāyakusumāñjali of Udayanācārya (A Critical Study)*, Vidyanidhi Prakashan, Delhi.

UNO, Atsushi (宇野 惇)

- [1996] 『インド論理学』, 法蔵館, 京都.

YAMAKAMI, Shōdō (山上 證道)

- [1993] 「Nyāyabhūṣaṇa の研究 (8) 知識の真・偽をめぐる Mīmāṃsā 学派と Nyāya 学派との論争」, 『京都産業大学論集 人文科学系列』 20, pp.126–144.

NKus

- Nyāyakusumāñjali of Udayanācārya with Four Commentaries*, Pt. Śrī Padmaprasāda Upādhyāya & Pt. Śrī Dhunḍhirāja Śāstrī (*ed.*), Kashi Sanskrit Series 30, Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi, 1957.